

本文資料としての書跡「白氏文集」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 千葉, 仁美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19569

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 文学部 専任教授

氏名 神鷹 徳治 (印)

(副査) 文学部 専任教授

氏名 山崎 健司 (印)

(副査) 大東文化大学 文学部 専任准教授

氏名 山口 謠司 (印)

1 論文提出者 千葉 仁美

2 論文題名 本文資料としての書跡「白氏文集」について

(英文題) On Calligraphy of “Bai-shi Wen Ji” as the text material

3 論文の構成

中唐の詩人・白楽天の別集「白氏文集」は、平安時代に遣唐使・留学僧によって日本に将来され、日本文芸に多大な影響を与えてきたことは言を俟たない。我が国に渡った「白氏文集」は唐鈔本に由来する写本であったと考えられ、平安時代以来の旧鈔本は、宋代以降に出版された刊本とは本文が異なることが確認されている。唐鈔本に連なる日本旧鈔本は、刊本以前の旧態とともにその本文も白楽天在世当時に近いと目されており、鈔本が殆ど残存しない中国・朝鮮に比して、書籍史・文学史上の貴重な資料といえることができる。

日本旧鈔本の諸本には主たるものに金澤文庫旧蔵本、『管見抄』等があり、これまでの研究で整理・分析が進んできた。しかし、これらの旧鈔本諸本はいずれも完本にあらず、旧鈔本未発見の巻次も多い。この缺を補うために着目されるものが、書跡として現存する「白氏文集」である。「白氏文集」は書の正統かつ基礎的な題材であり、現存作品数も多い。この中には平安時代書写のものも含まれ、旧鈔本諸本よりも書写の古いものすら存在する。こういった書跡は、刊本以前の旧い本文を遺存している可能性が高く、本文資料と

するに足るものの、これまで書跡を総括的に対象とした本文研究は行われてこなかった。本論文は、書跡「白氏文集」の本文資料としての資料性を検討・考察するとともに、その問題点を指摘し、旧鈔本としての書跡「白氏文集」を本文資料として活用する試みを行うものである。本論文は三部構成となっている。全体の問題意識を提示した序章に続く第一部では、書跡を主たる対象として、各々の本文的性質と諸本との関係を提示することで本文資料としての書跡の多様性を提示する。第二部では、補遺資料として書跡を他の資料と併用し、本文資料としての書跡をより具体的なかたちで活用する試みを行っている。第三部では、書跡「白氏文集」本文活用のための作品整理表が付される。終章によって本研究を総括し、今後の課題が示されている。具体的には、以下の章によって構成される。

序章

第一部 書跡「白氏文集」の本文

第一章 熊野切について

第二章 光泉寺切について

第三章 『予楽院臨書手鑑』について

第四章 書跡と「文苑英華」本文について

第二部 書跡「白氏文集」の資料活用

第一章 宮内庁蔵那波本「白氏文集」書入と「野跡」

第二章 「琵琶行」法帖と「光源氏物語抄」

第三章 熊野切「贈杓直」と「沙石集」

第三部 書跡「白氏文集」資料一覧表

終章

4 論文の概要

以下、各章ごとに、その概略をまとめる。

序章では、書跡「白氏文集」についての問題および方法について述べられる。

第一部第一章では、伝宗尊親王筆「熊野切」の文献的特徴を示している。「熊野切」のうち、巻第六と巻第五十七の二種を大別して本文校合を行った。前者は旧鈔本本文と一致し、とりわけ金沢文庫旧蔵奉重校訂本の校訂に関連する可能性が指摘された。後者は、刊本との間に異同はそれほど見られなかったものの、用字の別に相違が見られ、今後僚巻が新出することが期待される。

同第二章では、伝北条時頼筆光泉寺切をとりあげた。光泉寺切は、第一種（巻第三）・第二種（巻第四）の二筆に分かれ、その本文がともに旧鈔本本文に属することが確認された。その本文は、平安鈔本である神田本よりもむしろ鎌倉鈔本諸本に近い本文を持ち、伝承筆者である時頼と時代をほぼ同じくする。また、第一種では、神田本校合注に書きいれられた本文と一致した切が発見され、神田本校合におけるあらたな一資料とすることになった。

同第三章では、近世の書家のひとり近衛予楽院による「予楽院臨書手鑑」を対象とする。近衛予楽院は種々の臨書にあたり底本を直接目睹していたものと考えられ、その臨書は平安朝書跡の直接の写本であると目される。「予楽院臨書手鑑」所載の切 223 葉のうち、「白氏文集」の

ものは18葉15種であり、おおむね旧鈔本諸本との本文の一致が認められ、旧鈔本未発見の二編の異同を確認することができた。また、「官牛」一首について別の予楽院臨模本と校合したところ、両者の間で本文間の異同が認められ、書跡には各々個別の書写態度が存在するという認識を再確認している。

同第四章では、唐鈔本由来の本文を少なからず遺存する総集「文苑英華」と書跡との本文の性質について論じる。「文苑英華」、旧鈔本、書跡間で少なからず本文が一致し、書跡が旧鈔本本文を保持するとともに、「文苑英華」本文が旧鈔本本文を遺存する貴重な刊本であることを再確認するに至った。

第二部第一章では、古活字本・宮内庁蔵那波本「白氏文集」における書入と書跡とを対象とする。同書には、小野道風・行成などの書跡との校合書入が確認されており、巻第四（新樂府）の小野道風筆書跡との校合注の底本について分析した。結果として、那波本書き入れの「野跡」本文、伝小野道風書跡の本文の両者は、本文をおおむね一致させているものの、異なる本文をもつ箇所も発見され、校合の「野跡」本文は、今回検討した伝小野道風書跡とは別系統の本文をもつ書跡を底本とすることが明らかになった。

同第二章では、江戸期刊法帖及び「源氏物語」古注釈所載「琵琶行」を対象として、本文の検討と復元を試みる。この法帖は尊円親王筆書跡を底本とした模刻本で、近世の手本として標準的なものである。所載の「琵琶行」本文は、旧鈔本諸本と一致し尊円親王が底本とした本文が旧鈔本本文を所載した資料であったことを指摘した。法帖の「琵琶行」後半部脱落箇所につき、この缺を補う為に「源氏物語」古注釈である「光源氏物語抄（異本紫明抄）」を用いた。引用本文は旧鈔本本文と一致し、参照底文が旧鈔本であることが判明した。両者はともに断片であるが、「白氏文集」の断片的所載資料として、相互補完的に活用しうることが確認された。

同第三章では、第一部第一章で対象とした「熊野切」と、「沙石集」所載本文との相互補助的な資料的活用を試みるものである。熊野切の内、つれ2葉が残る「贈杓直」(0270)は、旧鈔本本文と一致し、金沢文庫旧蔵奉重校訂本の本文修正による難読箇所の読解を補う好資料であることを指摘した。また、「沙石集」引用本文について、旧鈔本本文と概ね一致するものの、ままだ一致しない独自の本文が見られ、そこには書写態度に厳密さが欠けており、書跡の場合と同様に、その精度に注意すべきであると見解を述べている。

第三部では、「白氏文集」所載の書跡作品を、花房番号（「白氏文集」詩文の作品番号）によって検索することができる書跡「白氏文集」資料一覧が提示されている。この資料により、「白氏文集」詩文との校異が容易に確認できるため、これまた貴重な資料であるといえよう。

終章では、本論文を総括した上で、今後の課題が述べられている。

5 論文の特質

本論文の特質として、次のような諸点が挙げられる。

第一に、書跡「白氏文集」を再整理したことである。書跡「白氏文集」の収集は書学の大家・小松茂美氏によって行われているが、本文校勘の立場から書跡を網羅的に整理・検討したものは本論文が初めてである。第三部に付された書跡作品一覧は、白氏詩文から所載の書跡を知ることができる利便性があり、また小松氏未収の書跡をも含めている。「白

氏文集」校勘のみならず、周辺領域においても資するところのある成果である。

第二に、本文資料としての書跡の性質を指摘したことである。従来、書跡の欠点として、テキストに誤写が多く見られることが指摘されてきた。しかし、本論文では、書跡のうち、本来は訓点本であったと目されるものについて、もと訓点本の書跡は、テキスト保存を目的としているため、その他の書跡とは本文遺存の観点で別の性質をもつものと論じている。書跡を本文資料とする際、その本来的な性質に着目すべきことを主張する。

第三に、書跡のもつ本文が旧鈔本本文であることを明らかにしたことによって、従来知られてきた旧鈔本本文の補完を行うことができる。前述のように旧鈔本の白氏詩文はすべて見つかっておらず、また、既存の旧鈔本であっても異文が一例のみに留まることが少なくない。本論文では、書跡の本文がこれらの状況に対して補完的な役割を果たすことが明らかにされた。書跡を改めて本文資料とすることによって、新たな旧鈔本本文を見出すことができるとともに、旧鈔本諸本間の多彩な異同を提示する資料となっている。

第四に、書跡と諸資料の活用を提示したことである。断簡を多く含む書跡資料を、那波本「白氏文集」書入、及び日本古典文学所載の引用本文といった断片的資料と併用することによって、日本における「白氏文集」旧鈔本本文の多様性を提示した。

6 論文の評価

前節で取り上げた諸点は、そのまま本論文の評価すべき点となろう。結論として、本論文で取り上げた書跡の本文を旧鈔本系の本文であると実証できたことは、今後、唐鈔本・旧鈔本の遺されていない「白氏文集」の本文批判を行う際に、本資料を原詩文に近いものとして活用できることとなった。本論文によって、既知の旧鈔本に加えて、書跡資料も旧鈔本の一本として十分な価値があることが判明した。既に太田次男氏が述べているように、旧鈔本系の本文が必ずしもひとつ本文に統一されているわけではないが版本と異なる文字を扱っていることは確かである。とりわけ真筆の書跡の中には既知の旧鈔本の作品にはおさめられていない詩文もあるので、重要な資料となるのではなかろうか。

本論文の課題として以下の点を挙げる。今回、書跡は書影によって参照しているが、今後可能な限り実物を目睹することが望ましい。ただし、書跡には個人蔵のものも多く含まれ実見の機会をもつことが困難であるため、展覧会等の機会や目録を積極的に活用する必要がある。「白氏文集」諸本についても同様である。また、今回提示した校異の方法について、必ずしも一見して理解できるものではないため、読者に対する配慮に改善の余地があるのではないだろうか。さらに、本論文では、対象とした詩文の読解の提示に乏しい面が見られる。旧鈔本・刊本の本文の違いについて、近時明治書院より刊行された全訳注（本文是那波本を使い、巻三・四は神田本を使用している）を参考として、具体的な読解の例を挙げることによって、「白氏文集」をより深く理解することが可能になるであろう。

しかし、これらの課題は、論者の知識獲得と調査に対する努力により今後の研究が期待されるので、論者の研究者としての資質を否定する要素にはなり得ないと判断する。

7 論文の判定

本学位請求論文は、文学研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（文学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上